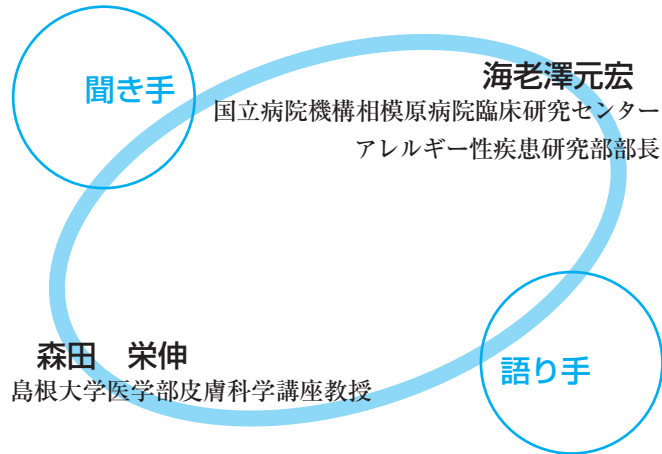


食物依存性運動誘発アナフィラキシー



対談「わが研究を語る」では、1つの研究テーマに真摯に取り組んでこられた先生から、その研究に着手されたきっかけやその成果、現在の研究から今後の展望についてまでのお考えをお聞きしてまいります。今回は、小麦の蛋白質 ω -5グリアジンが小麦アレルギーの重要な原因抗原であることを発見し、その後のアレルギー診断にも大きく貢献された島根大学医学部皮膚科学講座教授 森田栄伸先生をお招きし、「食物依存性運動誘発アナフィラキシー」をテーマとしてお話をうかがいます。

(聞き手：海老澤元宏)

生化学の手法を学びFDEIAの研究へ

海老澤 本日は食物依存性運動誘発アナフィラキシー(food-dependent exercise-induced anaphylaxis：FDEIA)に関する研究の第一人者、森田栄伸先生をお迎えし、お話をうかがいたいと思います。早速ですが、先生が皮膚科でアレルギーの研究に従事されるようになった経緯をお話いただけますか。

森田 私が広島大学の皮膚科に入局した年に、山本昇壯先生が赴任されました。私は臨床と並行して研究をやりたいという思いがありましたので、先生にお願いしてテーマをいただき、ヒスタミン

分解酵素を精製する研究を始めました。モルモットの門脈から肝臓を灌流すると、灌流液の中にヒスタミンを分解する強い酵素活性がみられます。それを濃縮してクロマトグラフィーで分析し、電気泳動で分離するというものです。

海老澤 研修医のころから生化学的なことを学ばれていたんですね。

森田 そうですね。のちにドイツのキール大学に留学したときも、クロマトグラフィー、電気泳動、アミノ酸シーケンスといったさまざまな生化学的手法を学びました。ここでは乾癬の研究が主だったのですが、帰国後はアレルギーの領域で、学んだ分析手法を活かしたいと考えました。

海老澤 その後FDEIAの研究をはじめられたわ